ピースフェア報告

2023.7.31　井上未菜

今年は私にとって2回目のピースフェアでした。林京子著『祭りの場』を読みながら会場に向かい、ちょうど読み終わった頃に最寄りの駅へ到着。千葉市空襲犠牲者のお名前の読み上げと、ステージ発表で植松さんとのお話にご一緒させていただきました。

植松さんも私も、福岡県北九州市の小倉という街で過ごした経験があります。戦時中、兵器工場が置かれていた小倉は、8月9日の原爆投下予定地となっていました。植松さんのお話しのテーマが「戦争で潤った街」ということで、今回対話の機会を頂きました。当日は、植松さんの展示制作秘話や広島の話題であっという間に時間が過ぎてしまいました。学びの多い時間となったのですが、ここではせっかくなので、あの場であまり話せなかった小倉について書かせていただこうと思います。

8月9日、小倉の空は雲に覆われていて、原爆投下地は変更されました。これ自体はそれなりに多くの人が知っていることです。しかし、だからこそ、街が戦争の記憶を留めづらいのではないかと感じています。小倉が被爆地と紙一重であったこと、「戦争で潤った街」であったこと、直接・間接的に、市民が戦争加害者であったこと。それらがどれほど結びつき、市民の共通の記憶になっているのでしょうか。小倉で教育を受けてきた自分としては、首をかしげざるを得ません。記憶が作られていないことが問題なのではないかと思います。「原爆を免れたこと」が、街が戦争にどう加担してきたのか自己反省する機会をそいでしまったのではないのか、そして戦後、「平和」や「豊かさ」という言葉により、歴史が覆い隠されてしまったのではないか、そのように思います。

戦後78年目を迎える今日、ますます戦争体験の継承が困難になっていると聞きますが、それだけでなく、記憶を「掘り起こす」ことや、出来事を丁寧に「繋げる」作業も必要になるのではないかと感じます。また、戦後生まれの個人として、どのような姿勢で過去と向かい合うのかも問われているなと改めて感じました。

個人的なことで恐縮ですが、周りにこのような話ができる仲間がたくさんいて、「考える」ことに真剣に取り組んでいた昨年と違い、今の自分は、誰かに、何かに引っ張られなければ、敢えて考えようとしなくて済んでしまう環境にいます。もちろん、今やっていることと間接的に関わることはたくさんあり、学んできたことや、経験が生きる瞬間は多くあります。けれども、ピースフェアでお会いした方々のように、戦争についてとことん考えたり、行動に移したりすることはほとんどなくなってしまいました。最近の自分を反省しつつ、元気をもらう一日でした。ありがとうございました！